# 未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

## ⑯慶長奥州地震津波

### 三陸津波ではなく奥州津波

東北地方太平洋側で発生した巨大津波の五番目は、慶長16（1611）年の慶長奥州津波です。マグニチュード8クラスの大地震が引き起こした津波で、仙台藩領では1786人、盛岡藩と弘前藩では人馬合わせて3千余が溺死したという記録があります。人口もそれほど多くはない時代のことですので、約4800人の犠牲というのはかなり大きな災害です。

蝦名裕一さん（東北大学災害科学国際研究所准教授）が各地の史料を丹念に調査したところ、図1のように北は道南の松前から南は相馬まで、津波が襲来したという記録が確認できました。同じ日に江戸でも地震があったという史料がありますので、江戸まで揺れるほどの大きな地震だったことがわかります。震源地は三陸沖から仙台沖と推定されています。

この地震と津波は東日本大震災まで慶長三陸津波と呼ばれていましたが、現在は慶長奥州津波と呼ばれるようになりました。三陸海岸といえば青森県の鮫半島にかけての地域ですが、慶長津波は三陸よりもずっと南の岩沼や相馬まで到達していました。三陸の範囲を大きく越えた津波だったにもかかわらず三陸という印象が強くなりました。そのため、400年前に東北で発生した津波にも三陸津波という名前が付けられてしまったのでしょう。東日本大震災後の調査では、まさか仙台湾や相馬に津波が来るとは思わなかったという人がたくさんいました。

蝦名さんは、だからこそ津波の範囲を正しく表現するために慶長奥州津波と呼ぶことを提唱しています。当時の奥州（陸奥国）は、現在の福島県・宮城県・岩手県・青森県のことですので、その名称からも巨大で広範囲の津波だったということが、すぐにわかるからです。

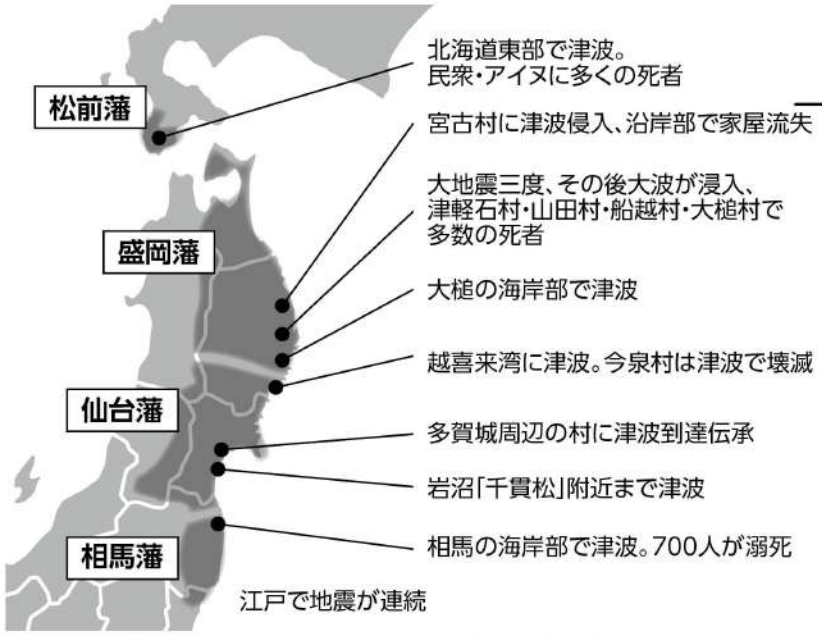
### 海に出て助かった政宗の家臣

伊達政宗は、慶長奥州津波による藩内の被害を徳川家康に報告しています（『駿府政事録』）。そこには、次のような逸話が記されていました。

「政宗が肴を求めて家臣二人を岩沼に派遣した。釣り船を出すとき、漁師たちは海の色がおかしいので船を出せないと言った。家臣の一人は船を出すのをやめた。もう一人は、命令を実行しないのは主君をあざむくことになると言って漁師に船を出させた。沖合に行った所で、海面が盛り上がり大波のように迫ってきた。船は山の上の千貫松まで流された。彼らが山を下りると漁師たちの村は無くなっていた。これを聞いた政宗はその家臣らに褒賞を与えた。家康は、主命を重んじたから災難を免れたのだと感心した」

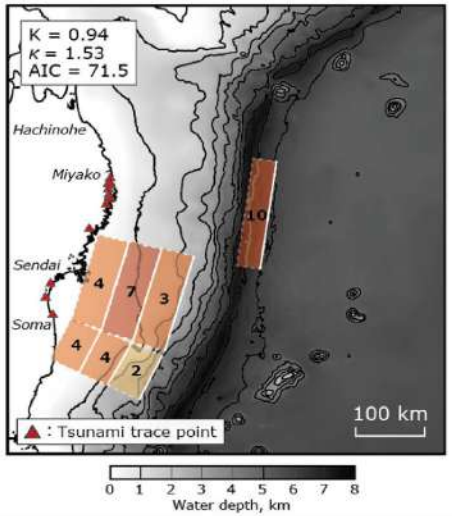
この話をどう評価すればよいのか、迷いますね。本来なら、荒れた海に漕ぎ出すのは命知らずな行動です。しかし危ないと考えて出漁を見合わせた家臣が津波の犠牲になり、主命を守って無謀にも漁に出た家臣のほうが助かりました。政宗や家康からすれば、危険を顧みずに船を出した家臣は忠義の手本です。だから褒美を与えて讃えたのです。

ただし現代の私たちは、この話を主従制のカガミとしてではなく、津波のときには船を沖合に出したほうがよいという教訓として受けとめたほうがよさそうです。




各地に残る慶長奥州津波の記録（東北大学蝦名裕一准教授のまとめ）

慶長奥州地震の断層すべり量




古文書から推定した震源域。数字の大きさは断層のすべり量。今井健太郎「東北地域災害科学研究」51, 2015年。

**ひらかわ・あらた**
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。